

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00248

研究課題名（和文）地歌箏曲における古態の楽器に関する研究～現物調査と楽器復元による受容の可能性～

研究課題名（英文）Research on ancient musical instruments in Jiuta sokyoku-Possibilities of acceptance through physical survey and restoration of musical instruments-

研究代表者

長谷川 慎（HASEGAWA, MAKOTO）

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：00466971

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：地歌箏曲における古態の楽器は、京都における「柳川三味線」を除いて昭和初期以降ほとんど使用されなくなっている。近年、実演家がコンサートで使用する機会が増えているが、SP録音に残る当時の音の再現には至っていない。その原因として三味線の皮と張り方の変化、箏糸の変化と調整法の変化が挙げられる。本研究はこれまで積み上げてきた研究成果を基盤として、地歌箏曲の古態の楽器の現物調査によりアーカイブし、古態の楽器を調整し実際に演奏することによってフィードバックされた結果から古態の楽器の楽器調整について研究を進め、現代における古態の楽器を用いた演奏の可能性と課題を明らかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的独自性として、研究代表者はこれまでの継続した三味線の音色に関する研究で一定の成果を挙げていることを挙げる。楽器としての先行研究もほとんどなく、前述の通り古態の楽器に関する研究は過去に行われていない。また、学術的創造性として、西洋の古楽器演奏のような概念が現代の地歌箏曲界にはほとんどない。ごく少数であるが研究協力を依頼し、これまで演奏を共にしてきた数名の地歌箏曲演奏家が興味を示し演奏会で取り上げ始めてきている。成果発表演奏会を行った際には全国より参加があり、古態の楽器への関心の高さを感じた。本研究を押し進めることで地歌箏曲における古態の楽器演奏を定着させたいと考えた。

研究成果の概要（英文）：With the exception of the Yanagawa shamisen in Kyoto, old-style instruments have rarely been used in jiuta and sokyoku performances since the early Showa period. In recent years, performers have been having an increasing number of opportunities to use them in concerts, but have failed to reproduce the authentic sound that can be heard on old SP(78rpm record) records. This has been attributed to changes in the skin and the stringing of shamisen, and in koto strings and adjusting methods. This study builds on the findings of previous research to clarify the potential for, and the challenges surrounding, the use of old-style instruments in contemporary performances. It investigated the adjustment of old-style instruments based on archived evidence from surveys of old-style instruments used in jiuta and sokyoku and on feedback after performances using old-style instruments adjusted in various ways.

研究分野：芸術実践学・音楽教育学

キーワード：古態の楽器 箏 長磯箏 五八箏 柳川三味線 野川三味線 地歌 箏曲

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

昭和初期頃までの地歌箏曲に用いられた京都・大阪を中心とした芸系の地歌三味線の音色は柔らかく「サワリ」がよく響く楽器であった。この音色の根源は楽器の形状そのものの違いではなく、胴部分に張られた「皮」の張り方によったことが、当時の実演家の芸談に残っている。これは「水張り」と呼ばれる方法で、地歌だけでなく義太夫節に使われる太棹三味線にも用いられており、当時は一般的であったようである。今日、水張りによる皮張りは文楽で演奏されている義太夫三味線の他は、京都系の柳川三味線の一部の実演家および祇園の芸妓が弾く柳川三味線に用いられる他はほとんど見られない。その理由としてはこれまでの研究代表者の行った研究で明らかとなった次の3点が挙げられる。

現在主流の皮の張り方である「カン張り」(注:事前の処理でほとんど水分を与えずに乾燥した状態に近い方法で張るやり方)に比べて事前の処理(注:水に浸して皮に水分を与えておく)に手間がかかること。

水分を多量に含んだ皮を張ることから張り上がり(注:完成後のこと)の皮の張り具合を確かめながら皮を張ることができないこと。

完成後の三味線の音色は「倍音」が多くなり、「サワリ」が多くノイズーな音となることから音程を取りにくいこと。

本研究は、学術的な研究に加えて研究代表者の演奏経験の両面から、地歌箏曲の古態の楽器は十分魅力的な楽器であり、かつ、今日画一化されたともいえる地歌箏曲の演奏表現に幅を持たすことのできる楽器であり、現代においても十分実演家および愛好者に受け入れられるという仮説のもと研究を進めた。

本研究の対象である、地歌箏曲の古態の楽器に関する研究は少ない。文献では、昭和初期の雑誌「三曲」の雑誌記事に散見する程度である。実演家の動きとしては、「柳川三味線」については先述のように京都に一部で細々と伝承が行われてきている他、柳川三味線による地歌演奏を行う「やなみ会」会員によって東京でもその音色を聴くことができるようになった。「野川三味線」については長谷川慎が科研費(課題番号:24520139)の成果をもとに平成25年に東洋音楽学会で行った口頭発表および地歌演奏グループ「男で地唄」の全国公演で演奏し音色の復活をみて以降、少しずつ地歌箏曲の実演家によって演奏が行われるようになっており愛好家らの大きな関心をひくところとなっている。同時に、これらの二つの古態の楽器に合奏される「箏」も、かつては一般的で現在はほとんど使用されない「長磯箏」(京都系)と通称「五八箏」(大阪系)についても、地歌箏曲の一部の実演家が積極的に演奏に用いており、段々と古態の音色を再び聴くことができるようになってきている。

半世紀以上前に姿を消したり、伝承が細くなったりしたこれらの地歌箏曲に用いられてきた古態の楽器は、近年再び表舞台へと上がりつつある。しかし、三味線の皮張りや箏の弦の「糸締め」については、当時どのような調整がなされていたかまだまだ研究の余地を残している。

2. 研究の目的

本研究は、以下の6点を研究の目的とした。古態の地歌三味線と箏の外観の特徴(撥、駒、箏爪、柱など付属品含む)の現物調査、 「水張り」の作業工程と使用する皮の現状、古態の箏に関し「箏糸」の糸締めに関する情報、古態の楽器の演奏に関する現代の楽器との異同、実演家と聴衆の古態の楽器の受け止め、若年実演家の古態の楽器の受け止め、である。

3. 研究の方法

本研究は、フィールドワーク、文献調査、実演家と楽器製作者への聞き取り調査、楽器の現物調査、音源収集による古態の楽器の音に関する調査、高等学校における古態の楽器を活用し、授

業を通して若年実演家の受容に関する観察で研究を進めた。最終年度の成果発表会としてレクチャーコンサートを開催し研究成果を発信した。

4. 研究成果

本研究を開始した 2019 年度年明け以降、未曾有の感染症拡大により多くの実演家は舞台での演奏に制限がされたが、舞台での公開演奏ができなかった反面、インターネットでの動画公開が活発となり、現在では古態の楽器を用いた多くの演奏動画が公開されている。本研究においても同様であり、成果発表会は最終年度に 1 回のみで開催となった。しかし、公演動画を Youtube で公開し全世界に向け配信することができたことは大きな成果の一つである。

研究成果について、本報告書では文字数の関係から 2 で述べた と について報告する。

に関して成果発表会を開催した。公演は 2 部形式とし、第 1 部は、研究分担者の野川美穂子氏の司会により実演家の古態の楽器演奏に関する座談を実施し演奏者自らの言葉として古態の楽器の魅力を語った。続く演奏では、これまでに入手・整備した古態の楽器（柳川三味線・野川三味線・長磯箏）を貸与し演奏に取り組んだその成果を、研究協力者の中井智弥氏、そして研究分担者の長谷川愛子氏による演奏で発表した。第 2 部は岸野次郎三作品を「善知鳥」「狐会」「古道成寺」の 3 曲を取り上げ、研究分担者の久保田敏子氏の解説、そして古態の楽器による演奏発表を行った。特に「狐会」では、「石村近江」の焼印がある古態の三味線（以下「石村近江三味線」）、柳川三味線、野川三味線、現代の地歌三味線による比較演奏という実験的な試みを行い、音による地歌三味線の変遷を紹介できた。また「古道成寺」では、岸野が活躍した時代の三味線に近い作りと考えられる「石村近江三味線」を用いて、古態の楽器の演奏法の検証を行った。

「石村近江三味線」は、棹の幅が 2cm に満たない極細三味線である。現行の三味線は「下がり」（注：棹と胴の取り付け角度）がほぼ「0」（注：棹面と胴面がフラットな状態）であるのに対し、「石村近江三味線」は胴の棹側が約 2mm 低く音緒側が約 2mm 高く仕込まれている特徴的な作りとなっている。これにより、弦の張力が弱くなることから、現行の柳川三味線の撥（写真 1 の下側 2 丁）のように撥の「しなり」を出した撥では、弦の跳ね返りが増長されて、テンポが速くりズムの細かな旋律の演奏は「やりにくい」ことがわかった。そこで、撥に関しても撥先が薄くしなりのない古態の形状の撥を用いた。この点は、幕末頃に京都の鶴岡検校が古態の形状から現行のしなりをもつ撥へと改良をおこなったという伝承に合致し、柳川三味線が三味線発生当初から変化をしていない古態の形状をしてはいるものの、棹と胴との仕込み方に変化があったことの証明になるのではないかと仮説を得た。なお、「石村近江三味線」と同時期に製作されたと考えられる「高砂」銘の古態の三味線も同様の作りがなされていたり、また、明治・大正期に京都で製作された柳川三味線の中には「石村近江三味線」とは逆の仕込みがされている三味線もあつたりと、今後さらに古態の三味線のサンプルを集め柳川三味線の古態の楽器に関しても調査を進めたい。図 1 は津田道子（1998）が示した「下り」（ママ）の図であるが、この図は後者の「下がり」を示している。今日製作される柳川三味線には下がりをつけない（今井伸治氏談）ことから、古態の形を止める柳川三味線も演奏者の嗜好に合わせた時代に応じた変遷があったことが考えられる。成果発表会については以下に動画を公開しており、本報告書と併せてご覧いただきたい（https://youtube.com/playlist?list=PLK1zzggKf2jub_Boc_zmqpAHIZFjA64Cy）。

また、「石村近江三味線」の演奏法に関して、試行錯誤をする中で地歌箏曲実演家の山口巖の雑誌『三曲』の中の「京流三味線の話」（昭和 2 年 7 月号、pp.39-41）に、京都における演奏法、演奏の品格、当時の楽器の特徴等を述べている記事を発見した。記事から指摘できることとして、

(1) 柳川流の地歌三味線は、

- ・ 近江の時代のものは皆細く、当時の長唄三味線は近江に近い

- ・鶴岡検校時代に少し太めにされたが、古いものは細いものであった
- ・幕末から明治初頭にかけて鶴岡検校が、棹を少し太く、撥先を厚く中央でしなる形に改良した
- ・昔の撥は、今の長唄の撥を細く小さくした様なもので先が薄くしならない形
- ・皮はハツ乳の猫の皮で、四ツ皮も用いない位であり、中でも 300～400g の猫の皮が最も珍重された
- ・撥音を嫌って、絃の音だけを用いる。それ故皮の上で弾かず、フチ（胴の際）で弾く

(2)野川流の地歌三味線は、

- ・三味線も撥も大きく改良
- ・鶴岡検校改良とは逆に腰を厚く先を薄くそして全体を大きくしたのが大坂の津山撥

(3)九州の地歌三味線は、

- ・撥は大阪よりさらに大きくなった

ことが指摘できる。なお、同記事の中で山口は撥の扱いに関し「弾き方、としては爪弾きは許されなかったのです。又撥音を嫌って、絃の音だけを用いる様にしてあります。それ故皮の上で弾かず、フチの処で弾くので、のちに説明する鶴岡検校の撥先を厚くした改良もそれらの撥音をさけるための工夫も一つであったかと思われます。」と述べている。現在、京都における柳川三味線の一部の実演家には演奏法に関して「撥は皮に当てて重い音を出す」といった指導があるが、これは山口の説明とは逆となっており、記事がまとめられた以降に変化があった可能性がある。この点については今後も継続的調査を行う。

図2として、これまで得られた研究成果から地歌三味線の変遷に関する概念図を作成した。

次に、若年実演家の古態の楽器の受け止めに、音楽高等学校で箏と三味線を専門的に学ぶ生徒に対し古態の三味線を扱った授業を実施し、どのような関心を持ち、学習を通じ自身の専攻楽器への演奏に生かせるかについて調査を行った。研究分担者が勤務する東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の令和3年度前期授業「演奏研究」(4月～7月の9回)において「柳川三味線」と「野川三味線」の比較学習を行った。対象者は邦楽専攻(箏曲・長唄三味線)の2年生5名(男子2名、女子3名)である。授業では、最初に楽器、駒、撥の形状や特徴を説明し、生徒自ら手にとって確認した後にそれぞれの楽器を演奏した。それぞれの楽器について生徒が感じたこと以下の通りである。

柳川三味線

- ・手にした時にあらためて楽器が軽く、棹が細い事に驚く
- ・撥は日頃使っている津山撥、平撥との差が大きく扱い難い
- ・独特な音色を感じる
- ・一音一音の音色をより深く聴き、確かめながら弾く姿が見られる
- ・皮に当てない撥さばき、駒の高さに苦労
- ・ハジキ、スリの音が大きい事に気付く

野川三味線

- ・柳川三味線に比べ弾き易さを感じる
- ・撥が持ち易く、扱いやすい様子
- ・撥音、ハジキ、スリなど音量が大きい事を感じる

授業者から形状や特徴の説明を受けた後であるが、楽器の特徴を捉え、「独特な音色」や「撥音、ハジキ、スリなど音量が大きい」ことを感じており、授業後に生徒自身が普段演奏している三味線の演奏に対しても、音色や演奏法を意識することができるようになったことから、若年実演家

の指導に適切に古態の楽器の体験を取り入れることで、専攻楽器の演奏に対して学習効果があるという新たな仮説への示唆を得られた。この点は今後も継続実施する。

< 主要参考文献 >

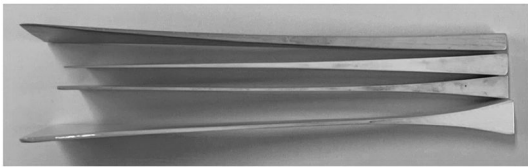
平凡社 (1989) 「日本音楽大事典」

津田道子 (1998) 「京都の響き柳川三味線」(社) 京都當道会

山口巖 (1927) 「京流三味線の話」『三曲』昭和2年7月号、美妙社、pp.39-41

< 参考資料 >

【写真1】古態の三味線の撥

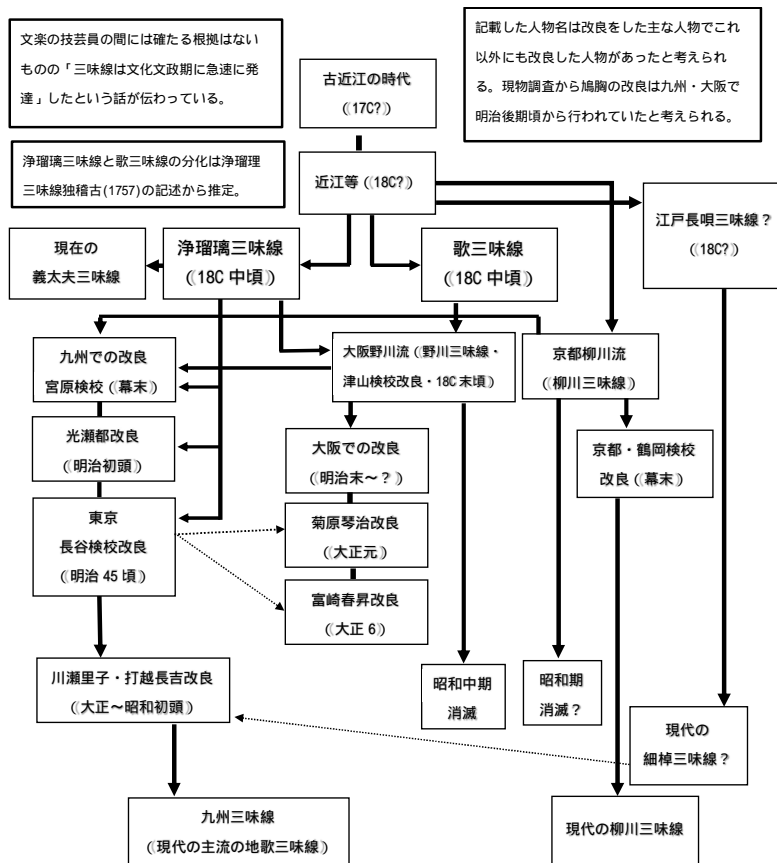


【図1】柳川三味線の「下がり」



出典：津田道子 (1998) 「京都の響き柳川三味線」図2-5-1「下り」(ママ)

【図2】地歌に用いられた三味線の変遷の概念図



実線は直接的、破線は間接的に影響を受けたことを示す。

図2注：長谷川慎 (2022)

九州三味線を完成させた打越長吉 (現在の鶴屋三絃店の父。昭和の名工) の師匠は鶴屋秋次郎で日本橋薬研堀にあった鶴屋三絃店 (長谷検校の三味線を製作)。秋次郎の師匠は小林幸栄忠継 (= 12代石村近江。11代近江の弟子)。「三味線製作で大切な点の一つは形(なり)の良さ」と当代打越朝男氏談。「鶴秋」銘三味線も石村近江代々の三味線の形も美しく整ったものである。

「第3回古態の地歌による地歌の会」配布資料、p.19を一部修正し転載。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 長谷川 慎、志民 一成、櫻井 千晶	4. 巻 32
2. 論文標題 音楽授業における歌唱モデル構築のための伝統的な歌唱を稽古する子供の歌い方の分析（2）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 静岡大学教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 32～40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14945/00028688	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 野川美穂子	4. 巻 -
2. 論文標題 「段の物」について－琉球古典箏曲《七段管攪》と本土の箏曲《七段の調》の比較を中心に－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 琉球古典箏曲調査報告書	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野川美穂子
2. 発表標題 演奏会解説
3. 学会等名 日本三曲協会定期公演「第七回 日本の響 三曲に描かれる能楽の世界<II>」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 飛驒組
3. 学会等名 日本三曲協会定期公演「第七回 日本の響 三曲に描かれる能楽の世界<II>」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 七福神
3. 学会等名 長谷川愛子動画サイト
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川慎、梅辻理恵、戸波有香子
2. 発表標題 飛燕の曲
3. 学会等名 箏曲組歌研究会京都公演
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川慎、長谷川愛子
2. 発表標題 古道成寺
3. 学会等名 第3回古態の楽器による地歌の会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川慎、野川美穂子、長谷川愛子、中井智弥
2. 発表標題 古態の楽器の魅力
3. 学会等名 第3回古態の楽器による地歌の会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川愛子
2. 発表標題 飛驒組
3. 学会等名 第3回古態の楽器による地歌の会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 すががき（長磯箏・古態の三味線）
3. 学会等名 鐵線コンサート（2021/11/21）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 六段管攪（長磯箏・古態の三味線）
3. 学会等名 鐵線コンサート（2021/11/21）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川慎、長谷川愛子
2. 発表標題 古道成寺（長磯箏・古態の三味線）
3. 学会等名 鐵線コンサート（2021/11/21）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 鶴の巢篋（古態の箏）
3. 学会等名 鐵線コンサート（2021/11/21）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川慎
2. 発表標題 千鳥の曲（箏）
3. 学会等名 鐵線コンサート（2021/11/21）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長谷川慎	4. 発行年 2019年
2. 出版社 長谷幸輝檢校没後100年記念誌	5. 総ページ数 6
3. 書名 長谷檢校ゆかりの三味線についての調査	

1. 著者名 久保田敏子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 長谷幸輝檢校没後100年記念誌	5. 総ページ数 9
3. 書名 長谷檢校ものがたり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

(1)Facebook「地歌三味線」
<https://www.facebook.com/jiutasoukyoku/>

(2)Youtube「第3回古態の楽器による地歌の会」再生リスト
https://youtube.com/playlist?list=PLK1zzggKf2jub_Boc_zmqpAH1ZFjA64Cy

(3)公演パンフレット「第3回古態の楽器による地歌の会」(全27ページ)
 執筆：長谷川慎、久保田敏子、野川美穂子
https://scii-my.sharepoint.com/:b:/g/personal/hasegawa_makoto_ci_shizuoka_ac_jp/EWjqTfL04bVKhLsXnF6z9_wBwAhsuImGHNv5HMhFAq8o7A?e=eDIISC

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久保田 敏子 (KUBOTA SATOKO) (10090200)	京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・名誉教授 (24301)	
研究分担者	野川 美穂子 (NOGAWA MIHOKO) (50218294)	東京藝術大学・音楽学部・講師 (12606)	
研究分担者	長谷川 愛子 (HASEGAWA AIKO) (90466970)	東京藝術大学・音楽学部・教諭 (12606)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	梅辻 理恵 (UMETSUJI RIE)		
研究協力者	中井 智弥 (NAKAI TOMOYA)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	菊聖 公一 (KIKUSEI KOICHI)		
研究協力者	村澤 丈見 (MURASAWA JOJI)		
研究協力者	今井 伸治 (IMAI SHINJI)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関